

第  
40  
回

# 全国高校サッカー選手権大会

昭和37年1月2・4・5・6・8日

西宮球技場

日本蹴球協会・全国高等学校体育連盟・毎日新聞社



## 40年の歩み

本大会も40回を迎えました。これから壮年期に入るところです。日本蹴球協会が設立してこととして40周年です。本大会は途中戦争や諒闇のため8年ばかり抜けています。実に日本蹴球協会設立以前に生まれたわけで、日本のサッカーの技術的な発展、全国的な普及の歴史と軌を一にしてのびてきました。大正7年1月12日、大毎主催の略称で大会名称も「日本フットボール大会」として発足しました。参加校は京阪神の自由参加を求めたところ関学高等部、御影師範、京都師範、奈良師範、姫路師範、明星商、神戸一中、堺中の八校でしたが、それがこんなに大きく成長しました。

初期のころはドリブルと長大なキックの試合で、馬力に富んだ御影師範が七連勝しました。創生期のころは全く師範学校が大会を独占していましたが彼等の普及により教え子たちが成長し、中学がとってかわる日がやってきました。

ショートパスの中学 師範のキック・アンド・ラッシュを破るためにはショート・パスしかないと技のチームがふえてきました。その先頭は神戸一中で、第8回大会に初めて中学として優勝しました。このころになるとチーム数もふえ、自由参加では大会の運営が行き詰まりかけました。ここに全国に呼びかけ、本当の意味の全国大会が生まれました。

全国予選制の確立 第9回から全国を8地区に分け、各地区優勝校によって争われることになりました。朝鮮からも参加し、のち台湾も加わりました。グラウンドも第1回の豊中から宝塚になり、鳴尾、さらにはいま高校野球をやっている甲子園球場でも行ないましたが、昭和4年南甲子園に芝生の専用球技場ができました。ここが中学サッカー・マンの憧れの地として、全盛期へ導いた南甲子園です。チーム数も予選参加校の増加から、8校が12校になり14校から16校へと飛躍しました。せっかく参加した朝鮮が2度目に初優勝したのに、年令制限にひっかかって約10年参加がとだえましたが、その間は兵庫で予選優勝をした御影師範が神戸一中が必ず優勝して

永く「蹴球王国兵庫」の名を大会にとどめました。ところが16回に至り突如岐阜師範が優勝し、初めて大優勝旗は兵庫の地を去り、それからは広島一中、埼玉師範と地方の充実が目立ちはじめました。

戦後の混乱期 幾多の名試合で全国に名を高め、水準を引き上げた本大会も、戦後は全くの群雄割拠で、開催地も南甲子園の閉鎖により「西宮の大会」に転じ、また学制改革により昭和24年には全国中等大会から全国高校サッカー選手権大会に改称されました。それからは地方勢の著しい進出が目立ち、宇都宮の北関東、秋田商の東北と優勝分布図は一変しました。予選参加校数も500から650、さらに最近では800校を越え、16から20、25、26校と漸次参加校数の割合によって増し、ついに第40回大会を期して参加選手待望の32校に達しました。この間名門地区がドンドン地固めをしてきましたが、最近の10年をとると、そのうち実に6回を浦和勢が優勝して現在では浦和の全盛時代といえましょう。これを紙一重で追っているのが広島で、三番手として控えているのが秋田商の西奥羽、藤枝東で代表される静岡、京阪神では大阪、兵庫の衰退にひきかえ山城を看板とする京都が進出、さらには四国、北九州と全国的な実力の平均化が目立っています。

国際試合への飛躍 技術的にながめると一時の混乱期から力強いプレーに重点が注がれ、さらにまた最近では、昭和34年から開催されたアジア・ユース・サッカー・トーナメントの刺激で、国際試合に通ずるサッカーへと飛躍しました。この大会を最後の資料として日本高校代表チームが結成されることとなり、高校サッカーの技そのものにも、ボールを正しく扱う気風がみながってきました。これらは底知れぬ普及とともに戦後の最大の収穫であり、ひいては日本サッカーの発展に直接のつながりをもたらしめています。90数カ国の愛好する世界のスポーツサッカー。その日本における強力な母体として、本大会の使命は重く、重いがゆえにまたそれが大きな誇りです。

### 商業写真 企画構成

- リーフレット、カタログ、ポスター制作
- 写真ディスプレイ デザイン

国際見本市会館1階

株式会社 朝日写真公社

大阪市東区内本町橋詰町58  
PHONE (94) 5079・5631

# 大 會 役 員

民弥三一 一夫郎 一郎次 誠喬雄 一次爾 一雄 義 一 一次雄男郎 敬彦司 久治郎 郎正治 恒敏 基雄 次作 夫 敬敬之 湯進 寿一 二哉 勝次 一郎夫  
三志  
 重 米清義 正正孝 榮歲 俊幹 能卓 左秀 朋 昌健 新義安 長忠 元孝 喜純 勝芳 德 正 律 撰岸 利清 博 京悌 璋正 秀 昌四 俊

田本林和野田村田下田松脇藤川林野田井 前 邑 田本田井田崎田村村口本 島安島城島里行 浦水村本野戸谷内田田川付 邑谷谷  
 砂福小大上高杉種久堀常門内香影小市堺 神 西森右栗有村杉尾吉中吉山橋岡飯時長結加浅中 松清岡松西瀬東竹西池前田 西大岩

齊男男郎雄 一 一郎 一久人 德一次了 弘策 三 隆 賞律 隆章 夫三 夫郎 肇久一 雄夫 豐郎 男雄 三 郎 三治治 幸治 司勉郎 夫也 雄吉 喬三 作治

方靜一 勝清 純探 信定 勝正 俊勝 亮泰 義 由 利博 繁耕 男司 定隆 信和 五玉 達銈 佐 陽孝 昌宏 賢隆 哲幹 哲敏 秀 泰豐 孝

向 藤田田田谷部水内 本坂野村田谷本 木 村居 越川 浦利内野田 木本村川本浦杉谷下田田 山田川水川山野山 納木上 刃本川田  
垣  
 日森佐坂神前水安清中乾石長小中津小川 青 山安名中松毛山島窪祝皆山木嵯鈴三大笹山本森 横宮津清石大角高佃加三水田川小宮

隆謙 操運一 衛夫人 進吉 一郎 男雄 藏温 仁雄 一 雄 雄丸 一郎 雄郎 郎三 作明 己雄 次郎 義直 吉勝 治郎 一直 夫雄 雄弘 作者 一 一次郎 男一 之 貢昭 三人 郎美 正宏 丸辰 郎  
兵  
 常 英榮 五靜康 春佑 志信 忠時光 実健 虎秀 重貞 次利 哲象 盛豐 義克 都順 与昭 利論 正雄 良忠 敏節 幸 宇關 公淳 運太 米旬 宜 義貞 義祐 重 和重 英俊  
喜太一  
一  
次  
一

田津井角藤 辺田井藤 村浅島部山橋垣 中田本島腰丸野井本置原川達田崎永本富光山 尾谷 藤井尾成石野 新 川野宮田田 木村谷田川島示永川腰橋野  
 上野玉両 齊田藤 駒須北湯手阿高市西岸田梅松篠竹松岩長松日盛小安福浜岩森成藤横畑松細林近向西上明中每赤矢二池菊西八木井中藤五宝魚衣竹高岡

長長長 問 与 務 長長員 長長員  
 會 會 會 員 員 員  
 譽 會 會 員 員 員  
 名會副 顧 參 總 委副 委 審副審 審副審  
 優秀選手選考委員

# 式 次 第

## 開 会 式

(1月2日 午前10時)

- 1 選手役員入場
- 2 開会の辞
- 3 国旗掲揚 (君が代斉唱)
- 4 優勝旗返還  
高松宮杯返還
- 5 主催者あいさつ
- 6 選手宣誓 浦和市立高
- 7 閉式の辞
- 8 選手役員退場 (午前10時20分)

## 閉 会 式

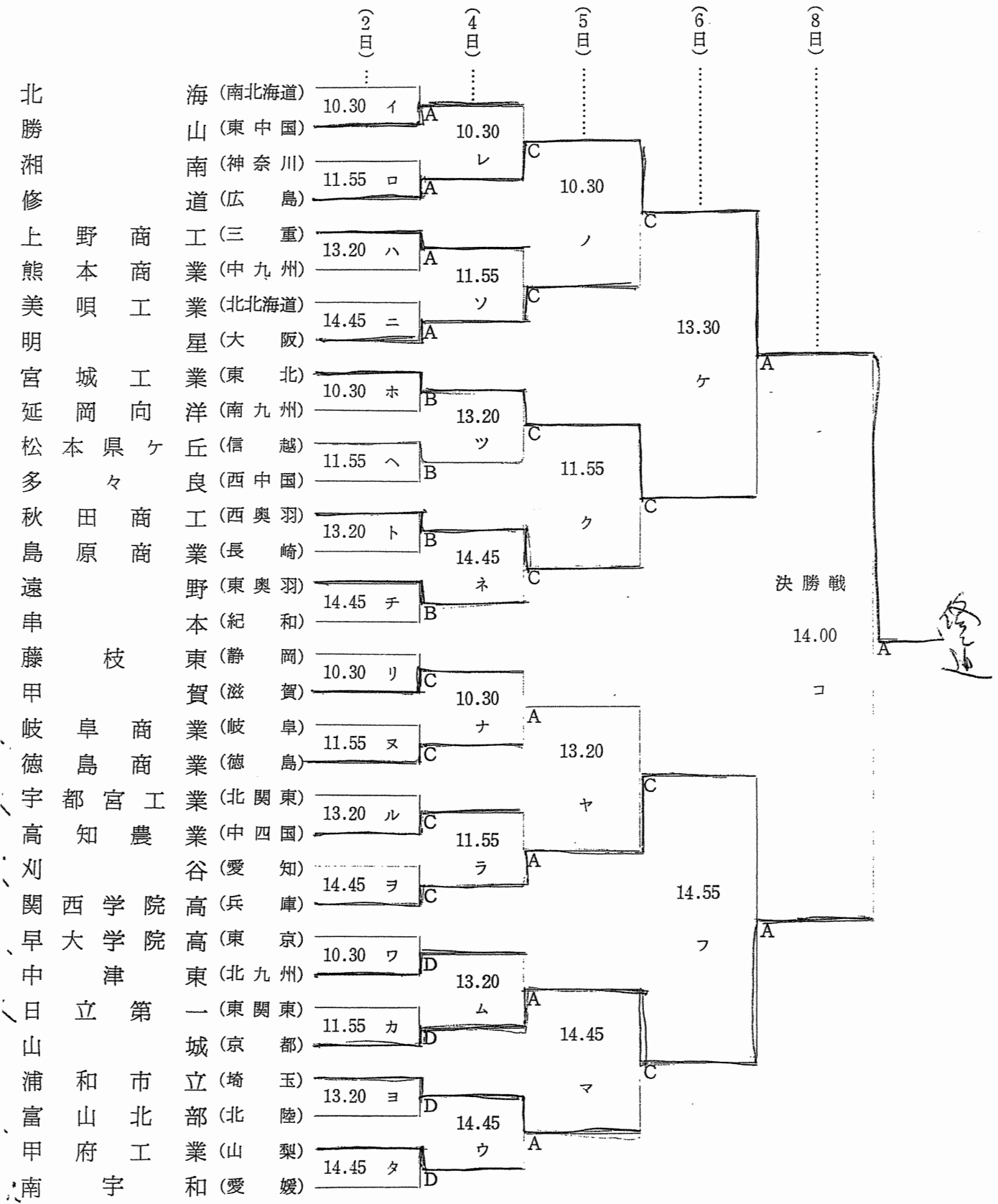
(1月8日午後4時)

- 1 選手役員入場
- 2 閉式の辞
- 3 優勝旗授与
- 4 高松宮杯授与
- 5 主催者あいさつ
- 6 国旗降納
- 7 閉会の辞
- 8 選手役員退場 (午後4時20分)

## 審判員及び戦評担当一覧表

記号	主 審	線	審	戦 評	記号	主 審	線	審	戦 評
イ	角 野	五 島	西 野	関 東	レ	関 東	角 野	井 谷	高 山
ロ	高 山	東 谷	前 川	岡村(兄)	ソ	清水(清)	清水(宏)	津 川	関 東
ハ	関 東	加 納	岡村(弟)	小 川	ツ	木 村	大 山	田 付	二 宮
ニ	関 東	高 山	清水(宏)	川 本	ネ	高 山	西 野	清水(清)	清 水
ホ	井 谷	石 川	宝 示	関 東	ナ	竹 内	瀬 戸	田 辺	関 東
ヘ	松 本	井 谷	加 納	安 達	ラ	関 東	関 東	関 東	川 本
ト	池 田	瀬 戸	魚 永	関 東	ム	菊 田	西	佃	小 川
チ	西 野	松 本	西 田	瀬 戸	ウ	池田(太)	魚 永	井 谷	竹 内
リ	菊 田	西	池田(障)	関 東	ノ	高 山	河 村	竹 内	関 東
ヌ	竹 内	水 上	三 木	西 邑	ク	二 宮	西 野	清水(清)	西 邑
ル	関 東	八 木	清水(清)	竹 内	ヤ	関 東	関 東	関 東	関 東
ヲ	清水(清)	八 木	田 付	関 東	マ	清水(清)	井 谷	角 野	川 本
ワ	関 東	佃	衣 川	関 東	ケ	池 田	関 東	関 東	関 東
カ	二 宮	中 田	赤 川	関 東	フ	清水(清)	高 山	菊 田	川 本
ヨ	津 川	大 山	田 辺	二 宮	コ	二 宮	井 谷	津 川	関 東
タ	関 東	津 川	藤 川	関 東					

# == 試 合 組 合 せ ==



A 第1グラウンド B 第2グラウンド C 第3グラウンド D 第4グラウンド  
 カタカナは審判員担当記符

早稲田大学高等学院

東京都練馬区上石神井1ノ216

(東京) 初

部長 河野 宥

監督 遠藤 四男夫

	氏名	学年	生年月日	cm	kg
GK	田原 幸夫	3	18.11.23	174	62
FB	藤本 克彦	2	19. 7.30	167	57
	高畠 康一	2	19.12.19	172	63
HB	○堀田 洋	3	18. 7.20	162	57
	植木 彰	3	18.10.21	168	65
	古明地 忠臣	3	18.10.20	169	60
FW	石井 正躬	1	20. 7.20	167	56
	贅川 高明	3	18.11. 3	171	60
	加藤 道生	1	20.11. 1	167	51
	日出島 忠純	2	19. 5.15	163	58
	石川 旺	3	18. 9. 2	180	69
SUB	村田 耕一	2	19. 4.11	173	58
	田中 靖浩	2	19. 3.20	165	58
	山崎 篤	1	20. 9.21	171	62
	山本 富士夫	1	21. 3.18	172	56
	村形 義明	1	19. 6.17	168	57

24年創部で初出場。強力さには欠けるが、オープン攻撃できるのが強味。RH堀田とL I日出島の精力的な動きから、両翼にまわし、そこからのリターン・パスが大半の得点源。決め役はCF加藤、LW石川だが、加藤のキープ力はFWの威力。HBは攻撃的で、どちらかといえば攻撃型。CH植木が守備をよくしめている。遠藤コーチは「強さはないがチームワークには自信がある。後半戦で崩れるクセを直すためマラソンもやって猛練習した」と初出場にしては自信ありげ。

〔過去の成績〕

東京準々決勝 城北2-1開成  
 早高1-0教大付  
 帝京1-0大泉  
 青学4-1羽田工  
 準決勝 早高1-0城北  
 帝京3-1青学  
 決勝 早高2-1帝京(二回延長)

本年度試合経過（練習試合を除く）

新人戦（二月二十一日～二月十七日）

一回戦	学院	5	(1 1 1)	2	石神井	勝
二回戦	"	9	(3 6 1)	0	育英	"
三回戦	"	2	(1 1 1)	1	武蔵	"
準決勝	"	1	(0 1 1)	3	桐朋	敗

東京都第三位

都王座戦地区リーグ（五月三日～五月二十日）

学院	2	(2 0 1)	1	井草	勝
"	5	(2 3 0)	0	武蔵ヶ丘	"
"	8	(4 4 0)	0	育英	"
"	6	(2 4 1)	1	石神井	"

春季早慶戦（六月一日）

学院	1	(1 0 1)	1	慶応	分
----	---	---------	---	----	---

都王座戦兼関東大会予選（六月三日～六月三十日）

一回戦	学院	4	(1 3 0)	0	芝商	勝
二回戦	"	1	(0 1 0)	0	教大附属	"
準々決勝	"	5	(1 4 0)	1	武蔵	"

この結果関東大会出場決定

準決勝	学院	2	(0 2 1)	1	城北	勝
決勝	"	3	(2 0 1)	2	帝京	勝

東京都優勝（三年ぶり二度目の優勝）

関東大会（七月二十四日～七月二十五日）

一回戦	学院	3	(1 2 0)	0	宇都宮学園	勝
二回戦	"	1	(0 1 2)	4	浦和高	敗

昭和三十七年十二月八日

国体予選（八月二十二日～八月二十九日）

一回戦	学院	12	(6 6 0)	0	千歳	勝
二回戦	"	2	(0 2 0)	0	日大	"
三回戦	"	3	(2 1 0)	0	武蔵	"
準決勝	"	4	(3 1 0)	0	大泉	"
準決勝	"	3	(1 0 2)	2	日大豊山	"
決勝	"	1	(0 0 1)	2	城北	敗

東京都準優勝

早朝定期戦第一回（九月二十二日）

学院	1	(1 0 1)	5	朝鮮高	敗
----	---	---------	---	-----	---

秋季早慶戦（十月十三日）

学院	1	(1 0 0)	0	慶応	勝
----	---	---------	---	----	---

全国大会予選（十一月三日～十一月二十四日）

一回戦	学院	11	(6 5 0)	0	郁文館	勝
二回戦	"	8	(3 5 0)	0	修徳	"
三回戦	"	3	(1 2 0)	0	桜町	"
四回戦	"	8	(5 3 0)	0	新宿	"
準決勝	"	1	(1 0 2)	4	教大附属	敗

東京都第三位

◎本年度総得点百十六点 総失点三十点 試合数二十九  
 試合一試合平均得点四点 平均失点一・〇三点  
 二十三勝五敗一分 勝率〇・八一四

●三十八年度新役員

部長	河野有先生	副将	形義明
監督	石川旺	副将	野崎担当
監督	安田一男	副将	野崎担当
監督	安田一男	副将	野崎担当
主将	石井正躬	副将	野崎担当
主務	加藤道生	副将	野崎担当

早稲田大学高等学院サッカー部